

〔表5〕 複写サービス処理件数

資 料	件 数	枚 数	摘 要
新 聞	345	5,543	
雑 誌	194	2,395	
参 考 図 書	498	3,614	
郷 土 資 料	378	10,826	
一 般 図 書	287	3,880	
官 報	17	112	
特 許 公 報	39	354	
そ の 他	14	422	
計	1,772	27,146	

〔表6〕 複写サービス利用者数

職 業 別	性 別	利 用 者 数	計
勤 労 者	男	557	593
	女	36	
自 営 業 者	男	58	58
	女		
主 婦		15	15
学 生	男	484	954
	女	470	
無 職 ・ そ の 他	男	130	152
	女	22	
計	男	1,229	1,772
	女	543	

〔表7〕 特別貸出し状況(昭和48・4～49・3)

貸 出 し 先	件 数	冊 数
県 庁 関 係	15	59
そ の 他 の 官 公 庁	15	50
図 書 館 ・ 公 民 館	56	231
会 社 ・ 事 業 所	27	64
報 道 関 係	26	60
学 校	31	123
一 般 利 用 者	21	47
計	191	634

第4節 館外奉仕

昨年から実施した専門分担制度も2年目を迎え、職員と利用者との結びつきも円滑になり、移動図書館、貸出文庫、親子読書普及活動等、それぞれにその効果が出はじめたと見られる年であった。

また対県外的には第3回北日本地区読書普及活動研究集会の当番県として、11月福島市において開催した。

さらに利用状況を把握し、利用者に対するより濃密な奉仕を行うための資料とするために、アンケート調査を実施した。調査対象は移動図書館、貸出文庫(分館をも含む)の利用者代表あて文書をもって質問し、ハガキで回答を求めた。回答

率は55%であった。

① 利用年数については

1年～5年	40.3%
6年～10年	37.1%
11年～15年	17.7%
16年以上	4.9%

となっており移動図書館、貸出文庫等の実施以来20年になるが、半数以上の70グループ(54.8%)が10年内外の利用をしていることになる。また県北の5年以内の利用34は団地等の利用の増加が目立っている。

② 利用グループの人員については、10人以内というのが38.7%を占めているが、グループとしての活動にはこの程度の人数が最もふさわしいということのあらわれであり、都市部においてこの傾向が強く家庭の主婦が近隣どおし集まり得る範囲としてもっとも自然な姿であろう。これが郡部になると、部落ぐるみといったことになり、その利用度はうすくなる傾向にある。グループ員の構成は

5人以内	23.4%
10人 "	38.7%
20人 "	19.3%
21人以上	18.6%

③ 利用図書の内容については、大きく4区分して見ると

教養(人生のためになる本)	22.3%
実用・趣味・娯楽	16.8%
読みもの(文学を含む)	38.6%
児童	22.3%

となっており、予想に反して「読みもの」は低く、教養、実用、児童等が均等化されてきていることは読書そのものが、生活に結びついてきていることを示しており、児童が一分野としてははっきりできてきたことは、今後の読書普及活動への位置づけを示してくれている。

④ 移動図書館の巡回周期については、館界で言う標準周期からすると数倍長い訳であり、多年それにならされた利用者は、一応適当としているものの、「早めてほしい」26.3%は各管内からの声であり、標準までもってゆけるよう方途を構るべきであり、それがまた利用の拡大にもつながるものと考えられる。

⑤ 図書資料に対する希望、意見としては、

新刊書を多くほしい	39%
希望する図書がほしい	28.1%
児童図書がほしい	14.2%
冊数を多くほしい	12.5%
その他	6.6%

となっており、図書館の「いつでも、誰でも、何でも」の原則は利用するものの願いであることを示している。

⑥ その他の希望、意見としては、移動図書館の利用によって、自分達の読書が支えられており、いっそう充実した巡回を希望するものが44.3%となっている。

次に巡回の時期、コース等の変更を希望するものが、予想以上に多かったが、これは農村地帯において農繁期をさけてほしいというものと、大半は巡回コースが毎回同じであることは、新刊書が自分達のところに来るまで